東京独逸学院でドイツ語の講習を受けた賢治と秀松

「東京独逸学院」ですが、宮沢賢治が盛岡高等農林2年生の1916年(大5)7月末から9月初旬まで、正確には7月30日から9月7日まで、1か月以上ですが、「独逸語夏期講習会」に受講するため通学した場所です。賢治にとっては二度目の上京で、麹町三丁目の栄屋旅館に宿泊して講習に通いました。その年の3月19日から31日まで、盛岡高等農林の修学旅行で初めて上京、西ヶ原試験場や駒場農科大学などを見学して、大きな刺激を受け、その年の夏休みを利用して東京でドイツ語の勉強をすることにしたのでしょう。

この賢治のドイツ語の勉強に付き合ったのが、クラスメートで寮友の高橋秀松でした。しかも、盛岡の寮で同室、寝食を共にしていたからでしょう、高橋秀松と一緒に同じ栄屋旅館に泊まり、仲よく「講習会」に一緒に通い、日本の文化を代表するとも言える「本屋街」の神保町の「東京独逸学院」で勉強したのです。東京での勉強だっただけに、盛岡での寮生活とは違った意味で、賢治と秀松の二人の間に、強い友情の絆が結ばれたことは想像に難くないと思います。賢治はニコライ堂、小石川植物園などを訪ね和歌を詠んでいますが、秀松も行動を共にしていたと思います。こんな紹介もあります。

「この時の東京滞在はおよそ一か月に及んだ。その間かなり歩き回ったらしく、こんな手紙が残っている。学校の同級生・高橋秀松宛の同年八月二十八日付のはがきである。

御葉書拝見致しました。
こちらに御出での間は色々御迷惑を掛けました御申し訳なく存じます。殊に御帰りの時は非常に急がせ申して済みませんでした。一般に見送りして行く者の方が見送られる人よりもつらい様でご在います。あれから私は銀座を遅くまで歩きました。もう前の様に灯も私を動かしません。即ち東京に飽きたのでございます。

高橋秀松は、一緒にドイツの語の研修を受けた友人。盛岡高等農林では一年次に寄宿舎生活を義務付けられていたが、ふたりは同室だったこともあり仲良くなっていた。」佐藤竜一『宮沢賢治の東京』(日本地域社会研究所)

一足先に帰った秀松を見送った賢治は、一人で当時流行の「銀ブラ」を楽しみながら、しかし「東京に飽きた」と言い、盛岡での秀松との生活に早く戻りたくなっているようです。ここにも賢治と秀松の交友の情が感じられます。